

## MtFの揺らぎを経験した人達についての文化人類学的研究 仙台市国分町とインドネシア・スラウェシ南部の事例を中心として

著者	林 千尋
雑誌名	東北人類学論壇
号	15
ページ	35-76
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00120344">http://hdl.handle.net/10097/00120344</a>

## MtF の揺らぎを経験した人達についての文化人類学的研究 —仙台市国分町とインドネシア・スラウェシ南部の事例を中心として—

林 千尋

### 1. はじめに

2015 年はアメリカの最高連邦裁判所で同性婚が合憲とされる判決が出され、日本でも渋谷区で同性パートナーシップ証明書が発行されるようになったことが話題となった。セクシュアルマイノリティに対する関心は高まり、企業や教育機関などでもセクシュアルマイノリティが過ごしやすい環境が求められている。性を理由に劣等感を持つ必要がない場所、ありのままを認められ、必要とされるような場所、すなわちセクシュアルマイノリティの「居場所」の整備は今後ますます求められることだろう。

セクシュアルマイノリティの居場所と聞いて真っ先に頭に浮かぶのは、日本最大のゲイタウンと呼ばれる新宿二丁目であろう。砂川秀樹は、新宿二丁目は同性愛者であることを前提に結び付いた連帯意識を基にして構成されたコミュニティであり、ゲイというアイデンティティを肯定的に受け止めることができる場所である、という(砂川 2003: 196, 2007: 200-213, 2015: 58-59)。

では、セクシュアリティを共有していない者が構成員となっている居場所や、セクシュアリティを共有していない者同士の人間関係はどのように成立しているのだろうか。セクシュアリティを共有していない者同士が作る居場所において、当事者やその周囲の人々は性に対してどのように向き合っているのだろうか。本稿では、仙台市国分町のニューハーフと、インドネシア・スラウェシ島のマカッサルのワリアというMtFの揺らぎを経験した人々の2つの事例に着目して上記の問いを考察する。

なお、MtF とは、先天的には「男性 (Male)」として生まれたが、「女性 (Female)」としての生き方に自分自身が適合していると感じ、「男性」から「女性」へ移行しようとする人／ことである。トランスジェンダーやトランスセクシュアルと表現さ

れることも多いが、本稿では、性や性別は固定的であるという印象を与えないために「揺らぎ」という言葉を使用した。

## 2. 国分町のニューハーフ、佐佐木ジャッキー

ニューハーフとは、「男性」性を持ちつつも、「女性」の風貌や仕草または身体的特徴を用いて接客する人を指す和製英語である。日本のナイトワークにおいては、こうしたニューハーフ性を用いたビジネス及び営業スタイルが存在する。ニューハーフバーとは、ニューハーフのスタッフのサービスを売りにした、酒類を提供する飲食店を指す。仙台市の国分町は、東北地方随一の歓楽街である。3000以上の飲食店があり、ニューハーフバーもいくつか営業している。国分町にニューハーフの店舗が構えられたのは、日本でニューハーフブームが巻き起こった1980年代であると筆者は推定する（林 2015: 54）。

筆者は、仙台市国分町にある「SBJ（仮名）」というニューハーフバーで、店のオーナーママ（接客責任者）を務める佐佐木ジャッキーに話を聞きながらフィールドワークを行った。以下では、佐佐木ジャッキーのライフヒストリーと、現在の生活について記述する。

### ① 佐佐木ジャッキーのセクシュアリティ変遷

佐佐木ジャッキーは、1967年オーストラリアのアデレードに、オーストラリア人夫婦の長男として生まれた。ジャッキーは、「生まれてから小学校に上がる頃までは特に、自分が女だとか男だとかいう観念はなかった」が自分にとってごく当然な事として女の子の輪に入っていたという。

幼稚園は、使わない服をチャリティーで集めて着てたから。私は集めてきた服の中から、自然におばちゃんを着るような服を選んで着ていた。性同一性障がいて（認識するように）なる前はね。

ジャッキーは、両親の別居、離婚、家庭内暴力を経験した。1981年、彼女が14歳の時、家庭での悩みを打ち明けていた年上の男性との交際を始め、16歳の時に初

めてセックスを経験した。ジャッキーはこの男性のことを「師であり、兄であり、良き理解者であった。彼に対しては恋というよりも愛情でしたね」と表現した。15歳の時、この交際相手に紹介されたバーでアルバイト店員として働き始めた。彼女によれば、そのバーの客や店員のほとんどがゲイであり、今でいう「ゲイバー」にあたるものだという。現在、佐佐木ジャッキーは自身のことをトランスジェンダーだというのが、このころのジャッキーは自分を「男性」同性愛者であると認識していた。

1984年、17歳のジャッキーは母親との喧嘩をきっかけに実家を飛び出し、車上生活を経て友人との暮らしを始めた。周りから一方的に攻撃されるだけでは生きていけないと悟ったジャッキーは、必要のない喧嘩をしながらも「自分らしさ」を出し始めたという。アパレルショップと並行して働いていたバーでは、ドラッグクイーン<sup>1</sup>としてダンスパフォーマンスを見せるようにもなっていた。1985年、彼女が18歳の時に、ジャッキーは初めて自分の性をトランスジェンダーだと考え始める出会いをした。

当時の彼氏の友人が紹介してくれたバーのお客さんの中に、超美人な人がいて、その人が男だった。トランスジェンダーという言葉は16歳、17歳頃から知っていましたが、実際会ったのは初めてでした。当時の店、トランスジェンダーいなかったから、トランスジェンダーはオープンじゃなかったから。みんなドラッグクイーンばかりだったから。トランスジェンダーには初めて会った。

「あなたは本当にそう（普通のゲイ）なの？ 他の考え方もあるんじゃない」と言われて、彼女としゃべっていく中で、自分を改めて見つめ直して、自分の内側は女性なのだと気がつきました。

翌年の1986年にジャッキーは「女性」として生きてみようと思決意した。彼女は「自分らしくいることを決意しました」と筆者に語った。親戚に迷惑をかけないよ

---

<sup>1</sup> ドラッグクイーンは、元々アメリカのゲイ男性を初めとして、世界各地のゲイ男性に広がったパフォーマンスやそれを行う人を指す。派手な衣装や化粧で、音楽に合わせて歌うまねをしながら踊る。

う、ジャッキーは故郷アデレードを出てシドニーへ向かった。名前も変え、「ジャクリーン（ジャッキー）」として新しい人生を生き始めた。



写真 1-1: シドニーでのジャッキー（18-20 歳の頃）（佐佐木ジャッキー提供）

シドニーにやってきて最初の数ヶ月は、金を稼ぐために、知り合いの紹介で知った店でゲイのセックスワーカーとして働いた。この仕事はパートナーができたのをきっかけに辞め、その後はショーダンサーなどの仕事をした。ジャッキーは、これを「一度目の結婚」と表現している。「近所の人たちは、ずっと独身だと思っていた男が、急に男とも女とも見分けのつかない人と一緒に住み始めて、不思議がったかもしれないですね」と彼女は語った。このパートナーと別れてからは、ゲイの友人とルームシェアをした。

お風呂に入る時に裸になっても、お互い恥ずかしがらずに生活できますから、一回だけ（彼とセックスを）しました。でも、何度か誰かをナンパして 3 人でセックス（を楽しんだこともあった）。ゲイの相手をナンパする時には彼が誘い、ノンケ<sup>2</sup>だったら私が誘いました。

---

<sup>2</sup> 生物学的性と、性自認が一致しており、性的指向が異性に向いている人のことである。ストレートともいう。

ジャッキーは 20 歳の時から女性ホルモンの摂取を始めていた。ホルモン剤を毎日飲み、月に一回のホルモン注射を摂取していた。また、性別適合手術をしたいと考え、精神科へ月に一回通っていた。手術のためには、患者が日常生活を送るうえで、男性器が邪魔になっているという医師の診断<sup>3</sup>が必要であった。医師から認めもらうために、彼女は 24 時間女性として生活すること、また、それにはナイトワーク以外の仕事に就いて、女性として昼間の社会の中で過ごしている姿を示す必要があった。ジャッキーはショーダンスを続けながら、ボランティア活動を始めた。ジャッキーが女性として暮らしていると認定した医師は、彼女に性同一性障害という診断を下した。ジャッキーは手術可能な年齢の 22 歳になってから胸部の手術を受けた。

性別適合手術を希望するトランスジェンダーを、トランスセクシュアルということがあり、トランスセクシュアルは一般に身体違和や身体に対しての激しい嫌悪感があると語られることがある。ジャッキーの場合は、特に自分の身体に対してこうした感覚があったわけではない。彼女は、「私は（身体に対しての嫌悪感）はなかった。そうだね。でも（男性的な身体は）いないものだったからね」と答えた。胸部の手術はジャッキーにとってはビジネスの意味合いもあった。

私の胸のサイズは E。おっぱいがなくては仕事できなかった。まあ（手術前にも）A か B はあったけど。ダンスの時の美しさとかもある。背中に羽をつけて、おっぱいを出して、T バックで踊っていた。

生殖器の手術は 28 歳になるまで受けなかった。ジャッキーが手術を受ける決断したのは、トランスジェンダー「女性」として残りの人生を送ることを受け入れた時であった。ジャッキーは、お金の都合と自分のタイミングがちょうど合ったのが 28 歳の時だったと語った。

---

<sup>3</sup> 性別適合手術は、倫理、宗教、社会的規範、様々な面からの批判が現在でも多く寄せられる。そのため、安易に行うことはできない。問題を軽減するためにも、手術前には十分なカウンセリング、手術が必要だとする医師の診断が必要とされている（山内 1999）。

私自身「性疾患だから」って言われて。20歳の時に医者から22歳になったら（性別適合）手術をしていいですよって言われた。でも、28なるまで、まだやなくていいなって思った。医師のカウンセリングで私はクレイジーじゃないし、性同一性障がいだねって言われ、（診断されていていつでも手術を受けられる状態だっ）たけど、自分のタイミングで28歳の時に今だなって思った。女性として生きて10年たっていたし、間違いなく男性に戻ろうと思わないだろうと思った。このまま生きていきたいって思ったから、今だったらって。

28歳の時に帰国して、お父さんと話して、（お父さんが）「どうするんだ。（手術）するのか、しないのか」って言った。「お金ないんです」って言ったら、「それだけだったら貸してやる。精神的に悩んでとかだったら、やれ、とも、やめろとも言わない。でも、問題がお金だけなら、やりなさい」と（父親が言いました）。

そのとき、やろうって（思った）。そろそろやりたいなーって思っていて、仕事も落ち着いていたし、今だったらいいなーって。

手術を受けたとしても、周囲の理解と自分の理解との間で揺らぐ経験は続く、とジャッキーは言う。

私手術して20年間経ってますけど、今もお店に立てば「元男、元男」と言われる。それが耐えられるか、耐えられないかだけだから。耐えられない人もいるから、手術して「もう、女性!」って思っている人が、お前「男だな」「おかまだな」「ニューハーフだな」って言われて、精神まいっちゃう人もいるから。結局、手術したかどうかなんて、自分と、パートナーくらいにしか分からない。

（手術は）自分の（性についての）パーセプション<sup>4</sup>の問題で、相手のパーセプションとは関係ないから。逆に、手術して完璧な女性になれるわけでもない。

（自分が手術をして自身を）完璧な女だと思ってもいいけど、第三者の見方って変わらないからね。

---

<sup>4</sup> perception。受け取り方。

性別適合手術をした後でも、周囲から勝手に自分に適用される性別があり、自分の性自認と一致しなくても耐え続けなくてはならない。だからこそ焦る必要はどこにもない、とジャッキーは語った。そして手術までに必要なことは、自分自身を理解することであり、自覚が得られるまではゆっくり考えることであるとも彼女は言っている。

今ね、「手術」「手術」って言うけど、焦る必要ないよね。やってしまえば戻ること出来ないからさ。だからね、手術は絶対焦っちゃだめ。手術は自分で（「今なら」っていう）タイミング分かるから、18 歳だろうが 20 歳だろうが 38 歳だろうが、分かる時に分かる。もちろんずっと分からない人もいるし、手術しても戻りたい人もいるし。自分のタイミングでやらなきゃ。（自分らしさは）学校行って学んで、社会出て変わる。今の自分らしさ、10 年後のらしさ、20 年後の自分らしさは変わります。今の考え方、10 年後の考え方、20 年後の考え方変わります。

生きていく中で「自分らしさ」を徐々に理解し、自分の未来を描くことができた時に、ジャッキーは生殖器の手術も最終的に受け入れた。

## ② 国境を越えた佐佐木ジャッキー

ジャッキーはシドニーでダンサーやバーテンダーの仕事を経験した後、ダンサーとして 1991 年に初来日した。彼女が海外へ拠点を移したのは、薬物依存症から脱却するためであった。

23 歳のころ、ジャッキーはドラッグ中毒となった。ゲイバーの先輩のホームパーティーでドラッグを体験したことがきっかけである。

野菜を切っていたとき、「あーんして」って言われて、野菜の切れ端などを口に入れられると思いました。口を開けて入れられたものを飲み込むと、LSD（ドラッグ）。壁がぐらぐらしてきて、先輩に「壁が揺れてます」って言ったの。そしたら、ディスコに連れて行かれて。でも、（薬ももう）飲み込んでしまったから、もう仕方ないと思って付いて行きました。



ジャッキーはそれ以来薬の使用を止められなくなったのだと言った。周りのゲイバーのドラッグクイーン仲間の多くがドラッグ中毒であった。ジャッキーは仲間たちに、当時交際していたドラッグのディーラーを紹介し、その見返りとして自分は無料で薬を手に入れることができたと言っていた。

でも先輩（が口の中にドラッグを）入れたからって、（中毒になったのは）先輩のせいじゃないからさ。初めて（ドラッグを）体験して、自分がはまっただけからさ。まあ、当時（使用を）止めようと思わなかったですね。

その頃ジャッキーはダンスショーのチームを組んでいたの、動き続ける原動力としてドラッグを必要としていた。薬による興奮で無理矢理体を動かし、興奮で夜は眠れず、朝は倦怠感から薬を使用するという悪循環に陥り、薬を止めることはできなくなっていったという。ジャッキーは「言い訳だけど」付け足し、少し黙った。

でも、そのうちエスカレートしてきて、止めたかったから、外の仕事探して、日本で仕事しました。あっちの（国の）バーにいたら全く同じことになっていたから。だって目の前で（ドラッグが）手に入るから。

ジャッキーはドラッグの使用を絶つために、海外に働きに出ることを決意した。ちょうど日本のホテルなどに女性ダンサーチームを派遣し始めていた知り合いに、ドラッグクイーンを海外に派遣している事務所を紹介してもらった。事務所に入って半年後の 1991 年 7 月（24 歳の時）にジャッキーは来日し、仙台の「アルカディア（仮名）」でダンサーとして興業ビザの切れる期日まで 6 ヶ月間働いた。「アルカディア」は、ニューハーフによるショーパフォーマンスを見ることができる、またニューハーフによる接待が売りの風俗店<sup>5</sup>であった。

---

<sup>5</sup> 飲食店と風俗営業を行う風俗店との違いは、談笑やお酌などによって歓楽的雰囲気をかもし出す方法により客をもてなす「接待」が後者にはあり、風俗営業をする場合は公安委員会の許可が必要である（砂川 2015: 144-145）。

仕事だから。・・・日本で見たことないショーはウケた。ファイア・ショーとかね。分かる？ 火を食べる。あとは、外国の歌、クチパク（リップシンク）でしたけど、私が歌ってるって思ったお客さんもいて、歌うまいですねって言われた。そのあとは CD とか、テープとか。そのお店は懐メロメインだったから探しました。この曲でパフォーマンスやってって（店側からも）言われて。一人でしたから（曲に合わせて）自分でダンス考え直しました。

ショーは問題なくこなしたジャッキーだが、接客には相当困惑したと話す。彼女は席に着いて客をもてなすという日本の接客スタイルになじめず、はじめのうちは接待をするように言われても断っていた。

初めは挨拶程度（しかしません）でした。（一応）辞書は持ってましたけど、私はダンサーとしての契約だから、（客と）しゃべんなくていいって思っていました。最初のころは薬の禁断症状でヴァーってなった（イライラしてた）のもあったし、（日本の接客）スタイルが分からなくて、ホステスなんてやりませーん、って言うてましたね。店長もマネージャーも困ってたね。今考えると生意気ですね。

でも、たしかにホステスはやらなかったけど、日本語しゃべれなくて、申し訳なかったから、忙しい時は皿洗いとかの手伝いはしていました。私はお金貰う、その分だけの働きをするのが当然。今（世の中に）そういう work ethics（職業倫理）はないですね。当時はそんなに仕事があるわけじゃない。仕事くれるってことはありがたいことでした。

2 週間もすればだんだん覚醒剤もしたくなってきました。仕事のやり方も、見ながら、これが日本のスタイルって分かってきた。大人ですから。日本語を少しずつ覚えて、お客さんの顔も覚えていって、ホステスとして接客をしていきました。お客さんのお誘いにも、答えなきゃ失礼ってことも分かってきた。とにかく、一生懸命やりました。お金ほしくてだけやってたではありません。「おかま!? 外国人!?（どうせ何も）できないんだろう」みたいな偏見を変えたいと思いました。プライドありましたから、どうだって見せたかった。プロだから。（今までオーストラリアで接客対象だった）ゲイ客と、（日本のバーの主な客層を占め

る) ノンケの客で、ウケる内容は違う。けれど、お客さんも喜んでくれる、(私は) よっしゃ! ってなる。それは変わりません。

店のイベントのクリスマスパーティーでは、ジャッキーが率先して仲間のメイクを手伝い、大いに盛り上がったという。最短契約期間の3ヶ月を延長し、興行ビザの在日許可期間ぎりぎりの6ヶ月間を国分町で過ごした。

(イベント成功時は) まわりから「ジャッキーのおかげです」って言われて、楽しかった。それに、自分は、初めはホステスも、あれもこれもやらないって言って周囲を困らしてたのに、一緒に働く仲間ができたって(感じて) 嬉しかった。

(契約最短期間の) 3ヶ月だったら、どんなところでも我慢できると思った。でも、(6ヶ月頑張れたのは) マネージャーと店長のおかげ。店の輪の中に入れてくれたから頑張れた。(当時の国分町には) 小さい居酒屋がいっぱいあって、そこで「ジャッキー飲みに行くよ」、「ジャッキー、ビール飲む?」って。その時の、温かさがあったから日本に戻ることにしましたですね。マネージャーと店長がいなかったら今(私は) いません。

ジャッキーは、一時帰国した後、半年ほどして今度は自費で日本に渡戻り、働き始めた。東京、埼玉などで働いた後仙台でダンサーとして雇われた。

空港着いたら4万円しかなかった。それからなんだかんだで(お金) 無くなって、東京の事務所に仕事あるよって言われたから、新幹線代は友達に借りて(東京へ行って)、3ヶ月は(東京の) 錦糸町で働いた。そのあと、新小岩。で、お金ためて仙台戻った。友達に紹介してもらったバーで働いて、3月から年末までね。ここで26歳になった。そこのバーはお客さんいなくて暇で、約束の給料もらえなかった。だんだん日本語覚えながら、ここじゃだめだなんて思い始めてきた。年末に(元いたバーを) 辞めて、「アルカディア」と同じ会社の「春さざんか」で新年から働き始めた。そこで27歳(なりました) ね。

面白かったよ。戦争だった。人気のお店だから、いろんなこと勉強させてもらった。「アルカディア」でのショーは一人でやるものだったけど、「春さざんか」

は他のスタッフとショーやりますから。私は、ママとチーママとはずっと喧嘩。権力のある人が、この子(スタッフ)好きって言ったら、その子はセンターです。もちろん実力も考えるけど、その前に(ママのスタッフに対する)好き嫌いで考えられます。良くあるパターン。私には良いパーソン(給料)もくれない。ステージ出ないから、お客さんからの人気ない、ステージ出れない、繰り返し。私はずっとママとチーママのバックダンサーでしたね。友達もいないです。でも、ママ、チーママのやり方あるからしょうがないことだって思ってた。でも、ダンスできる人辞めたりして、だんだん私がセンターを踊るようになっていった。お客さんは、(私が踊っているのを見て)「ジャッキー踊れるんだね!!」てなる。もうひっこめられない。そういう世界だからさ。パーソン(給料)も上がった。どんどん売り上げ伸ばして、次第に強さが出てきました。結果があるから、言いたいことも言えるし、(文句を言う側も)私に文句も言いたくなくなってくるんでしょ。達成感あったね。楽しかったよ。嫌い嫌いだけじゃない。楽しめるように頑張る。「アルカディア」での) 5年間。

実力を持っていたジャッキーは、少ないチャンスをものにして、頭角を現していった。そして国分町に初めてやって来てから 6 年目の 1997 年、ジャッキーが 31 歳とき、彼女は自分の店を国分町に持った。

これ以上は給料ももらえない、自分でやるべきだと思った。キャリアをあげたいじゃないけど、そろそろいいかなって。違う方法(違う働き方探したってだけ)。31 歳だから、これ以上ホステスとしては上にはいけない。お店のママになれるわけでもない。だったら、違う方向に行くってだけ。

国分町のいろんなお店に(挨拶がてら)飲み歩くのは独立前からずっと続けた。5 年間は毎日飲み歩いたよ。貯金しないのって言われたけど、それ(飲んでまわりに挨拶するの)も商売だし、結局自分に返ってくるから。国分町狭いから、店同士うまくしないと(助け合って生きていかないと)うまくいかない。

ジャッキーが働いているっていう店よりも、ジャッキーがママやってるお店を応援してあげたいって(思ってくれた)お客さんが多かったみたい。皆さんが、飲め飲め、食べ食べって(言ってくださった)。売上は高かった。

ジャッキーが初めて国分町にやって来てから 2016 年で 25 年目になる。場所を転々としながらも現在までに活躍の場を広げ、「SBJ」のオーナーママ、芸能タレント、ダンサーとして働いている。

### ③「SBJ」での役割と「人間として」の佐佐木ジャッキー

彼女が現在オーナーママとして働く「SBJ」の開店時間は、月曜日から土曜日の午後 9 時から午前 3 時であるが、日によって開店閉店時間の変動する。店のチャージ料金は 700 円で、飲み物の最低価格は 400 円である。ソフトドリンクはもちろん、ビールやシャンパンをはじめとする酒類、最初に出されるお通し料理とは別に軽食等を注文することもできる。

佐佐木ジャッキーがニューハーフとして働く上で要点となる「ニューハーフ性」は、下ネタ、セクシュアリティをネタにした会話、毒舌、「男性」性を持ちつつも「女性」の風貌や仕草または身体的特徴を用いた接客態度である。国分町では、「ニューハーフ」とは、周囲に望まれたキャラクターであり、ビジネスとしての価値がある。客からは、ニューハーフであるスタッフの「面白さ」を期待する語りが多く聞かれた。一つの店の雰囲気や特徴は、店側の選択によってあらわれてくるその店らしさと、店に来る客側の期待と評価がすり合わさるようにして出来ている。一方、客側の期待の中には、オネエ<sup>6</sup>言葉や毒舌や下ネタなど、日常の規範とは異なる環境を作る「ニューハーフ性」も含まれる。ジャッキー自身は次のように語った。

---

<sup>6</sup> 砂川によれば、「オネエ」とは、「女っぽさを過剰に、そしてデフォルメして、自分の言葉遣いや仕種に取り入れているゲイのこと」(砂川 2001: 210)である。「オネエ」を特徴づけるオネエ言葉とは、「女性的な」言葉遣いを土台にしながら、さらに抑揚を強め、「毒舌」と言われる発話内容を含む表現である(砂川 2015: 156)。石井はこの「オネエ」キャラクターは、社会の普通と言われる性質から外れているという負性を開き直って表現の域にまで高めた「キャンプ」という男性同性愛文化に通底するものだとしている(石井 2003: 146-153)。「オネエ」というありかたは、日頃押し隠している女っぽい態度や行動をさらけ出し、建前でものを言わない態度こそを重要視したものであるとわかる(大塚 1995: 34-35)。しかし、現在の新宿二丁目の観光バーにおけるオネエ言葉の固定化は、場を盛り上げる演出としての利用によるところが大きい(砂川 2015: 158)。

ニューハーフとして売っているけど、自分はトランスジェンダー。でも仕事入ると違うだから。お店の中で気にしたら売れないですね。ニューハーフって英語じゃなくて、日本の言い方。オカマ、オネエ。仕事としてウケる。仕事としてウケる、じゃないと、ただの女性なら（客としては）面白くないでしょ。仕事的时候はお面被っているのと同じ。女優よ、女優（笑い）。

（お客さんが）ニューハーフの我々に言えることと、女性に言えることは違うからさ。お客さんから見れば（ニューハーフは）元男だからさ。ここで（客がニューハーフに対して下ネタを）言えばみんな笑ってくれる。でも、一般の女性の前で言えば「何こいつ」ってなるとか。あとは、（男性が）女性に向かって「ブス」っていったら、みんな（悪口として）本気にとるだけ。一般の男性、一般の女性（がまねした）ならちょっときつい（トラブル）にもなることを、お互いを笑いにできるの。我々も毒舌いってもお客さんは笑ってくれるから、（お客さんに）馬鹿にされた分はそのままお返しできるの。お互いにね。

国分町で使われる「ニューハーフ」という言葉には、「自分らしさ」とは異なり、客のために演じられたものであるという含意がある。国分町のニューハーフは、2丁目の同じセクシャリティ同士が繋がるという役割を持ったゲイの「オネエ」ではなく、営業用のキャラクターとして「オネエ」を体現させている。このような「ニューハーフバー」では、揺らぎのある性をニューハーフというキャラクターとして表出することを求められるのだが、同時に、性別に拘泥せずに「人間として」の個人の魅力を重視する関係というのも築かれている。

店同士が互助ネットワークによって助け合っているという関係性は国分町では多く見られる関係性であり<sup>7</sup>、例えばある店のトイレに別の店の広告やチラシが張られていることも多い。このようなネットワークは、小さな店の不安定さを補い合い、個人と個人をつないでそれぞれの居場所を支え合うことに繋がっている。ジャッキーは他の店舗のスタッフとお互い店を持つ者同士として、様々な形で助け合っている。そのようなネットワークを結ぶ店の中でも、特に深く親密な関係を築いているバー

<sup>7</sup> 仙台市のゲイバーの互酬関係については張帥（2013）を参照されたい。

の店主に太田さんがいる。太田さんはストレートの男性で、プロレスファンや青森県の弘前にゆかりのある人が集うバーのマスターである。

4年前（2013年から）、ジャッキーがね、お店のアフター<sup>8</sup>でお客さんと来てくれて、そこで気が合って。それ以来、自分が弱いときには相談に乗ってもらって、ジャッキーが弱いときは自分を頼ってって言う感じかな。

15年前、仙台に店を出した時、国分町でジャッキーの名前を知らない人はいなかった。で、自分も知っていたんだけど、手の届かない存在だったんだよ。だから、まさかそのジャッキーが自分の店に来て、それからこんなに仲良くなるなんて思ってもみなかった。うちの店にもジャッキーさんの所の常連さん多いんだよ。

ジャッキーは、女でもない、男でもない、複雑だよ。女性だな一って思う時もあるし、男性だな一って思うこともある。励まし合ったり、遊んだりしてるよ。彼女は震災あった時、オーストラリアに帰って来いって言われたんだって。でも、帰らなかった。炊き出しとか自分でやって、賛同した人が協力した。生まれはオーストラリアでも、故郷は日本だって。日本に骨うずめるってさ。ジャッキーはオーストラリアで生まれたけどさ、日本人だよ。

太田さんは、自分とジャッキーは店のやり方や考え方が似ている、似た者同士だという。もちろん違う点はあるが、太田さんは人間同士としてジャッキーと付き合っているのだと言った。

俺のカラーとして何もしてないけど、お客さんが来てくれる。自分のカラーはよく分かっていて、お客さんが良いなって（思っ）来てくれる。人間合う、合わないあるからさ。俺はジャッキーと合うんだよね。ジャッキーは、好き嫌いがはっきりしてるからね。嫌いな人なら完全嫌いだし、好きな人ならすごい一生懸命見てくれるよ。

---

<sup>8</sup> 自分の店への出勤前、退店後、店の客と別店舗で飲食などをすること。

あ、ジャッキーと違うところがあるんだけど、ジャッキーは、一生養ってくれる人がいたらすぐにでも（仕事）やめるって。でも俺は、毎日現場に立ちたいね。60（歳）超えてもこの仕事やりたい。毎日刺激あるから。忙しい時も、暇な時もあるし、毎日違うから。青森には、息子がいる。いろんなこと経験しろって言うてるよ。

あと、（プロレスの話は）しない、しない。ジャッキー、プロレス大嫌いだもん。ジャッキーは、プロレス、戦って喧嘩をしてるのをなぜ見なきゃいけないんだ、って。血が出てるのは嫌（らしい）。俺とジャッキーも長いけど、ジャッキーはプロレス大嫌い、俺はプロレス好き。でも、俺とジャッキーは人対人として付き合っているから（プロレス好きかどうかは関係ないんだ）。

ジャッキーにとっても太田さんは大きな心の支えとなっている。

太田君は、本当に精神的に応援してくれたね。自分の支えとなってくれる人の中でも太田君の存在は大きい。私鬱（うつ）病だしね。ただ元気そうでも、実は元気がないことあるのよ。店をやりたくない時もある。鬱の症状が出ている時に、お客さんが飲みに行こうってなったら太田君の店に行くの。太田君は私の顔を見て今日の私の状態が分かるから、会話を引っ張ってくれて、気楽にさせてくれる。

（私のこと）先輩、先輩って呼んでくれてさ。とても良い方ですね。大好きです。会うべくして出会った存在です。

「SBJ」のスタッフには 2013 年 8 月から無償でジャッキーを手伝う男性の渋谷さんと、2013 年 9 月から 2015 年 4 月まで正規スタッフとして働く女性の瀬戸さんがいた。心地よい居場所を作るには、仲間の存在も大きい。

瀬戸さんはジャッキーと出会って 2016 年で 20 年になる。ジャッキーと共に働く機会があったのは 2013 年から 2015 年の間だけだが、2 人はそれ以前から友人同士である。20 年前に瀬戸さんが同伴の客と行った店で、ジャッキーのショーを見て感動し、自腹を切ってチップをジャッキーに渡した。それを覚えていたジャッキーが今度は瀬戸さんの店を訪れ、二人はそれ以来友人同士となった。瀬戸さんは、ママ業や雇われママ業を中心としたナイトワークをしていたが、2013 年の 7 月ごろに、当時



雇われてママをしていた店でオーナーとの価値観の差が原因で悩んだ。相談相手だったジャッキーに「**SBJ**」で働くことを勧められ、仕事を始めたのだという。「初めて会った時、私はママのことを笑顔の素敵なダンサーだと思って思った。ジャッキーママの笑顔がすごく素敵でさ、自分のお金でチップを払ったの」と瀬戸さんは言った。ジャッキーを一言では表すことはできないと瀬戸さんは筆者に語った。

男だろうが、女だろうが、人間は人間。人間ジャッキーが良いのよ。ふざける時もあるし、(人が)自分の悩みを話してる時は、ママ、あったかいよね。とにかく、彼女のことを良いなあって思って、そこから友達でいる。

でも、仕事の時は、仕事だからね。私もプロなので、ママはママ。私の上司。そういう意識はもっている。プロ意識とハングリー精神は大切だよ。友人と上司の違いは自分の意識の中である。彼女の店だしね。ママにその二つがあるのは当たり前です。なければ来ませんよ。

渋谷さんは「店長」と呼ばれている。渋谷さんは昼間は別の仕事している。「**SBJ**」では働いているわけではなく、週末のみ無償でジャッキーを手伝っている。渋谷さんは飲み友達に紹介してもらってジャッキーと知り合い、友人となった。

お客として飲んでてさ。団体さん入ってジャッキーさん一人で忙しそうだったから。洗物もできないくらいだったからさ。「やってくんなーい」って。「お代いらないから。好きなだけ飲んでいいから」って(ジャッキーに言われて始めた)。お互いの利益になるし。ママも、瀬戸さんも、お客さんの喜びを引き出してるね。

ジャッキーはプロ意識を持って、客にとにかく楽しんでもらうことを重要視している。スタッフもジャッキーの期待に応えて、多くの客を楽しませているのである。スタッフによって、ジャッキーにとっても客にとっても「**SBJ**」は居心地の良いものとなっている。ジャッキーは次のように「**SBJ**」のスタッフについて語った。

私と、なつみさん（瀬戸さん）と、渋谷さんは、3人合わせてチームジャッキーって呼ばれてるんだけど、本当に良いチームです。楽って言うのは違うかもしれないけど、本当に応援していただいている。なつみさんも渋谷さんも。ありがたい。昨日もみんなで飲んで、べろべろになって。

このように、ジャッキーが築いていた店を中心とした親密な関係性の中では、ジャッキーがニューハーフであることより、人間としてのジャッキーが好きで応援をするのだという語りが多く聞かれる。ジャッキーも、自分の友人達はジャッキーをジャッキーとして好きでいてくれると述べていた。

芸能人の誰々だから友達ってわけではないでしょ。ニューハーフのジャッキーと接するならそれは知り合いです。ジャッキーとして付き合わなければ友達ではない。あたりまえのこと。私をニューハーフとしてだけ接する人のことは、知り合い程度にしか思わない。同じ空気吸いたくないです。

佐佐木ジャッキーの周囲では、人間としてその人を好きでいる、というナラティブが相互に見られ、異なるセクシャリティを持つ者同士が個人個人の人間性を重視することで、セクシュアリティを人間評価の尺度から後退させているといえる。

また、「ニューハーフ」のバーに通う客であっても、通う店に求めるものはニューハーフ性だけではない。筆者は、50代の男性客と話したことがある。彼は、月に4回ほど1人で数件の飲食店を回って酒を呑みに行く、いわゆるはしご飲みをするが、「SBJ」に来る頻度は月に3回以上だと言った。男性客は、「ジャッキーとの付き合いは他の常連さんに比べればまだ浅いほうで、5年くらい」と語っていた。

お店で飲むのはやっぱり家で飲むのとは違う。家でも飲むけどね。家だといいいお酒が飲める。外は違うところに価値を置いてるから。一人飲み楽しいよ。（店で飲む価値は）いや、そんな非日常じゃないよ。（時間も）ちょっとしかないないしね。

ジャッキーのパーソナリティには興味を示さず、「ニューハーフ」との触れ合いという日常できないことを楽しむ姿勢の客たちの語りがあつた。一方で、この男性客は「SBJ」の非日常性を否定している。筆者が会つた19年間ジャッキーの店に通つてゐるという別の男性客は、筆者に対して話すときよりも、ジャッキーと向かい合つてゐるときのほうが穏やかに話してゐた。彼は、もちろん、特異な存在であるかのようにジャッキーを見るのではなく、ただ、酒を飲んで、ジャッキーと世間話をしつて帰つてゐた。「SBJ」に一人で来てゐたさらにほかの男性客は次のように語つた。

俺が最初に行つたときは、おそらく、昔の「SBJ」<sup>9</sup>だな。ジャッキーさんは、いろいろな人に慕われてゐるな。女性にも、男性にも。きっと大きな人なんだろうつて。半年に一回くらい病んだ時に来るんだよ。

また、太田さんのバーでジャッキーの話を聞いてゐた時、頻繁に「SBJ」にジャッキーに会いに行くという男性客が居合わせた。男性は次のように語つた。

何、ジャッキー？ ジャッキーは、好き嫌いというより、本音で話す人なんで、単に「金払つてゐるんだから良い思いさせてくれよ」みたいな人の中には、（ジャッキーのことを）嫌いな人もゐるかもしれないけど、そうじゃない人には良いと思う。

このように客はジャッキーの独自のキャラクターを重要視して店を選択してゐるのである。さらに、ジャッキーと客との関係が国分町を離れ、プライベートにおいてお互いがかけがえのない存在になつたケースもあつた。かつてジャッキーの客であつたSさんは「自分が人間不信になつたときに助けてもらつた。心から尊敬し応援したい親友である」、と話してゐた。

いやー、ジャッキーはこういう人だなくて（そのまんまのジャッキーと）付き合つてゐるから、あんまり（どういう人つてゐない）……。でも、優しい人だ

---

<sup>9</sup> かつてジャッキーが異なる場所に構えてゐた「SBJ」のこと。2011年の東北大震災により被害を受け、移転を余儀なくされた。

なって。うん。優しさの範囲を超えてるよね。人を助けることに関しては、自分ができる範囲を超えてしまう。普通、日本人とか、人って、この人にはこれくらいだなとか、これくらいで良いなとか、考えるじゃないですか。でも、それがないというか、自分のことを超えてまでその人に尽くす。周りがこれくらいでいいんじゃないって思うレベルを超えて、多少無理してでも尽くすんです。

基本的に私も彼女も性格さっぱりしてるし、ユーモアのセンスとかも共通だし。うん。そっくり。(でもここまで2人が似てきたのは) すり合せかな。一緒にいる期間が長いとだんだん本音になってきて。彼女も日本人の感覚分かってきて。最初からは誰だって本音で話さないでしょ。日本語だし英語だし。だんだん分かりあったのかな。

私が人間不信になった時に助けてもらった。裏表が無いっていうか。心の底からの好意。好意っていうか、裏がない。本当に心の底から出てる感じがする。私が、体調崩して、具合悪くて、外も出たくない、何もしたくないってなった時、声をかけてくれて、外に連れ出してくれて、どこ行くわよーとか、何するわよーとか。もし、そういうのがなかったら、私は本当にダメになっていたと思いますね。うん。私が受け身な人間なので、彼女が積極的に歩み寄ってくれなかったら、今の私達はないです。

私は今、姉妹として、彼女が自分一人でもがいている時とかは体調の心配とかをしますね。あくまで姉妹としてですね。良くも悪くも頑張りすぎるかな。昔よりましになったけど。あ、そういうこと(今は頑張っていないということ)じゃなくてね。昔は、無理して寝ないでお店やるとか、そんなことしてたから。周りはその努力は知らないから、何でもできる人とか思ってた、彼女のそういう所がかわいそうだなって。案外繊細なところもあるから。だから私は常に、無理しないでねって言ってます。我々は、彼女が頑張っているの分かっているから、ずっと味方でいたいと。何があっても味方でいなくちゃって。彼女のこと信じてるし。だから、私はジャッキーにダメ出しはしない。

S さんにとって、ジャッキーはかけがえのない存在である。また、ジャッキーにとっても、S さんは自分を理解し、支え続けている存在である。ジャッキーは次のように話したことがある。

家族だからね。相棒ね。マネージャー (S さん) は私のことについて知らないことないです。男も、仕事も。全部知ったうえで、それでも一緒。恋人より長い。日本に来て 2 日目からそうだったの。出会うべき運命だったのかもしれない。ある意味ね。24 歳で出会って、彼女も同い年で、おんなじ旬の時を過ごしているから、出会うべき人だった。

ジャッキーは、ニューハーフとして役割を果たす必要性を語った。しかし同時に、「でも、私がニューハーフだから来る、そういうお客さんは来ない。私がニューハーフだからじゃなくて、佐佐木ジャッキーだから来る。そうじゃなかったら他の店があります」と言い、ほかでもない佐佐木ジャッキーであることを自分の仕事のあり方として挙げている。ジャッキーは、ニューハーフではなく、一人ひとりの違う人間として自分を見て欲しいと語り、客側にその思いや自分がどのような人間なのかを折を見て説明することもある。

ジャッキーは、「ニューハーフらしさ」と、「佐佐木ジャッキーであること」を行き来しながら多くの客が楽しめるような空間を作っている。個人の「人間として」のパーソナリティは店ごとの特色にもなり集客にも繋がっている。

### 3. 南スラウェシのワリア、アデ・リナルダ

ワリア (waria) はインドネシア語英語辞典によれば「ワリア[ワニタ・プリア (wanita puria: 女男)]: トランスセクシュアル・トランスヴェスタイトの同性愛者を指す」(Echols and Shadily 1989: 613) と説明されている。「ワリア」という言葉は、ワリアの性質や行動の特徴などを同時に想起させる言葉でもある。文化人類学者のナンダの説明では、ワリアとは生物学的には男性だが、自己表現の仕方が女性である人を指す (Nanda 2014: 95)。例えば、女性的な服や髪形をし、また振る舞いも女性的で、性的指向が男性で、女性との結婚を拒むという (Nanda 2014: 95)。本稿では、「ワリア」を、①「現代インドネシアにおいて MtF の揺らぎを経験している人であり、周囲から、もしくは自身によって『ワリア』であると認識されている存在」、また、②「誕生時は男性と見なされたが、インドネシア社会で共有されている、

女性のジェンダーを自身の生き方として取り入れる傾向を持つ人」であると定義して記述を進める。

筆者がフィールドワークを行ったのは、インドネシアのスラウェシ島南部マカッサルである。インドネシアスラウェシ半島南部は、スラウェシ・スラタン州にあたる地域である。この地域の先住民族は、ブギス、マカッサル、マンダル、トラジャの4つである (Lathief 2009: 13)。それぞれの民族は集住しているわけではなく、ブギス人が多い地域、マカッサル人の多い地域、民族が混ざっている地域が半島南部に点在する (Lathief 2009: 13-14)。

筆者はアデ・リナルダという活動家ワリアを中心に彼女の家族、職場、関係組織に出向き調査を行った。アデ・リナルダ (Yade Rinalda Kamasi) はマカッサル生まれの 30 代のワリアである。1999 年にミスワリアコンテスト<sup>10</sup> (WCPAN: Pemilihan waria cantik peduli aids & narkoba) で優勝したことをきっかけに、2000 年から YGC に参加している。WCPAN は YGC<sup>11</sup>と KPA<sup>12</sup>共同開催のエンターテイメントと教育を合わせたイベントで、ワリア達に性の健康を守るための知識を広めていこうという狙いがある。1999 年優勝者のアデは、1 年契約で各地に講演などをしてまわり、その後 2001 年からは YGC でアクティヴィストとして働きながらキャリアを積んでいる。現在のアデの仕事は、主にマカッサルの GF (The Global Fund) プログラムの参加や、ホットスポットでのコンドーム配布などである。

<sup>10</sup> WCPAN: 1998 年から FPI のデモによる中止に追い込まれる 2010 年まで (マカッサルで) 毎年 12 月に行われていた大会で、ワリアやゲイの活動組織が企画実行したイベント。エンターテイメントと教育を合わせたイベントで、参加したワリアが得た知識や大会のことを周囲のワリアに紹介していく中で知識を広めていこうという狙いがある。大会では美しさよりも、教育のカリキュラムの中で得たドラッグやエイズの知識や性の理解、参加態度などを問われる。インドネシアの各地に同様のコンテストがある。

<sup>11</sup> 「YGC (Yayasan Gaya Celebes: スラウェシ島の力)」は、1992 年創設、1995 年活動を開始した HIV の感染防止活動を行うマカッサルで最も古い組織である。初期はレズビアンも YGC に所属していたが、レズビアンの活動は独立して独自組織を持ったため、現在の YGC はワリアとゲイが組織構成メンバーである。YGC はオーストラリアの支援団体からの資金を得て運営されている。

<sup>12</sup> KPA: Komusi Penanggulangan AIDS (エイズ対策委員会) の略であり、ジャカルタを中心としてインドネシア 33 州すべてに設置されている行政の部局である。マカッサルの KPA はマカッサル市役所 (Kantor wali kota) 内にある。他の団体と協力して HIV 感染防止活動を行っている。KPA は AIDS の危険にさらされている人に対する援助や教育プログラムと社会全体に AIDS の正しい知識を広めるプログラムに力を入れている。KPA 本部であるジャカルタの KPAN (Komusi Penanggulangan AIDS Nasional) から配られるコンドーム、注射針なども無料配布なども行っている。

以下では、南スラウェシのワリアの概況と、時代の変化の渦中にあるアデ・リナルダの生き方について記述する。

### ①南スラウェシのワリアとその歴史的背景

ナンダは、新たなセックス/ジェンダーアイデンティティの一つとして 20 世紀後半から 21 世紀初頭のここ 30 年で現れたのが「ワリア」と述べている (Nanda 2014: 90)。それ以前には MtF の揺らぎを経験した人々を指す言葉として、スラウェシ南部では「チャラバイ」や「ビス」があった。「チャラバイ」という言葉は元々「偽の女」を指すブギス語であり、身体的な性は男であるが、性自認としては女の心を持っており、女性役割を果たし、性的指向は男性に向いている者をいう (伊藤 2003: 227, 244)。ブギスにおいてビスは、神々とコミュニケーションのとれる聖性を持つ人間としてブギスでは解釈され、収穫祭や結婚式などで神々から恩恵を受けられるよう祈る役割を担っている (Darmapoerra 2014: vii)。ビス (Bissu) はチャラバイが務めることが多い (Lathief 2004: 1)。また、現在でも、スラウェシ島南部のルウ、ボネ、ワジョ、ソッペン、パンクップ、ピンラン、シドラップ、マカッサル、パレパレ<sup>13</sup>などの地区にビスの存在が見られると、ハリリントルは報告している (Lathief 2004: 2)。

ブギス社会にイスラーム教が浸透する以前、ブギス族の祖先の間では「アトリオリン (Attoriolong)」という信仰が行われていた (Lathief 2004: 9)。「ラ・ガリゴ」というブギスの伝承神話記録によれば、ビスはブギスのエスニックグループが誕生するよりも前に、ブギスの祖先にあたる人間たちの存在を補完するために、神の息子や土地の王 (Luwu・ルウの王) と共に神々から遣わされて、ラエラエ海から地上に降り立ったとされる (Darmapoerra 2014: 3・Lathief 2004: 2)。その後、ビスは神々の言葉 (空の言葉: Bahasa langit) を用いて、神々と対話することができるとされ、儀礼においても重要なポジションにあったため、スラウェシの地域社会の生活においてなくてはならない役割を果たしてきた (Darmapoerra 2014: 5)。チャラバイは、そのようなビスになることで周囲の尊敬を集めることができた。しかし 1957 年にインドネシア各地の王国政治がジャカルタ政府の中央集権政治に取って

---

<sup>13</sup> Kabupaten Luwu, Bone, Wajo, Soppeng, Pangkep, Pinrang, Sidrap, Kota Makassar dan Pare Pare (Lathief 2004: 2)

代わられると、ビスの威信が失われ、さらに軍隊を所有するイスラーム団体が唯一神のアッラーにそむく多神教者としてビスを攻撃した (Nanda 2014: 93)。1998 年にスハルトが失脚した後、新政府が地方の伝統文化を再活性化しようとしたことで、ビスやビス文化は伝統文化の一部として再復興されることになったが、20 世紀初頭からのこの一連の流れはビスの役割や立場を一変させた (Nanda 2014: 93)。すなわち、王国制度の崩壊と中央政府への統合、政治と宗教的圧力によってビスが絶滅しかけたことで、かつてのビスやチャラバイのあり方は大きく変化した。その後、新政府によって地域の文化保存政策が指揮され、ビスは保存の対象とされたが、その存在は「伝統」として尊重されても、本来の聖性は失われて形骸化しているといえる。現在、チャラバイやビスはイスラーム規範とは別の価値観の上に受容されたわけではなく、あくまでもイスラーム解釈に矛盾しないように制限されたあり方を強いられる結果となった。マカッサルで MtF の揺らぎを経験した人々が「受け入れられて」いないと語るとき、それはしばしば「チャラバイ」時代の彼／女らをめぐる状況が、今では偏見と差別に塗り替えられていることを指すのである。ズギスやマカッサルで広く使われてきた「チャラバイ」という言葉も、今日においては一般的な表現ではなくなっている。「良い」チャラバイとして認められれば、ビスという荣誉ある立場として歓迎されるはずだったかつての状況とは違い、現代の MtF の揺らぎを経験した人々は社会に受け入れてもらうために新しい戦略を模索しなければならないのである。

ワリアはマイノリティーグループの「ワリア」として、インドネシア各地で連帯して闘っている。南スラウェシのマカッサルには KWRM と呼ばれるワリア連合のマカッサル支部がある。マカッサルでは、ワリアに対する社会からの差別や偏見が強く、関心も薄い。MtF の揺らぎを経験した人々は、「チャラバイ」のような伝統的存在になる可能性からは離れ、「ワリア」として全国に広がる同士ネットワークに所属して差別的な状況を改善しようと奮闘している。

KWRM のリーダーであるマミ・リアは「ワリアを指針や決まりによってコントロールすることが可能になります。ワリアはコントロールされることが必要」、「私は（ワリア達が）どのように考え、どのように良い人間になるかを理解するのを手助けしているだけです。私は最も良いワリアの例を周囲に示している」と言った。『人間として』『良い』と周囲から認められれば受け入れられる」、や、「私は他のワリア



とは違う」といった発言はワリアの口から多く聞かれる。マミ・リアによれば、ワリア連合組織のおかげで年々セックスワークを稼業とするワリアは減少し、自立した「模範となる」ワリアが増えており、これは好ましい状況だという。マカッサルのワリアは、セックスワーク以外の就業機会に恵まれている。技術を身につけるための訓練を受けられることや、成功した先輩ワリアたちが、後輩ワリアのロールモデルになっているからである。

連合は、周囲から認められるためには規範を守り「良く」あることが必要とされると考えている。そのため、丁寧な振る舞いや、より受け入れられやすい仕事を選択するなどふさわしい行動をとりながら、「良い」ワリアとしての生き方、新しいジェンダーを構築していこうとしているのである。そうした中でワリアは、彼／女たちがインドネシア国民として妥当な権利を保障されるに足る存在であるというイメージを社会の中に作り上げようとしていた。偏見と差別に対してマカッサルのワリアたちは、あり方を「良く」することで、社会から受け入れられようとしているのだ。

## ②アデ・リナルダのセクシュアリティ

アデは 1981 年にマカッサルで生まれた。アデは家の跡取りである長男の父と、母との間に生まれた一人「息子」だった。元々、マナドという北スラウェシに由来を持つ家系であったが、軍人である彼女の祖父（故人）の出張に合わせて各地を転々とした。

私は 1981 年マカッサルで生まれました。現在、(2014 年 8 月時点) は 33 歳です。4 歳の頃に父がいなくなって、父の顔は全く覚えてないんです。あちこち転々としたけれど、祖父がマカッサルで隠居生活を送ることになったから（マカッサルに定住するようになりました）。母方の祖父は軍人でもあり、カトリックの司祭でもあったのです。

今でも彼（祖父）の話をしていると涙が出ます。彼ら（祖父や家族）をとてものがっかりさせてしまった。私は彼にとって初めての孫で、男子は親戚中でも私だけでしたから。母も責めるようなことは言わなかった。でもたぶん泣いてました。どこに自分の子どもがこんな風に生まれてくることを願う親がいるでし

よう。性別を変えたいと言う子どもが欲しいと思うでしょう。私は彼らの希望通りに生きることにはできない。でも、私は信じています。彼らは変わらず私を愛し、ハグしてくれると。

最初に彼女が自分をワリアだと認識したのはカトリックの SD (小学校) に入ったとき、同じような同級生が数人いたためである。それまでは、忙しい祖父と早くにいなくなってしまった父以外に、常に家にいるのは母と親戚の女性だけであり、そもそも男がどういうものなのかはわからなかったのだという。

私のおじいさんはとても忙しい人でした。ほとんど家にいなくて。家の中は母と 2 人のおば、従姉妹だけで、全員女の人だったんです。男の人はいなくて。男がどういうものなのかはわかりませんでした。だから、物心ついた時から女性だったんです。それからカトリックの小学校 (SD) に入ったら、私みたいな子が 3、4 人いたんです。ああ 1 人じゃないんだ、って思いました。私だけが病気なんじゃないって。彼/女達と親友になって。そこで私は自分はワリアなんだ、って思いました。

私たちはセクシュアルオリエンテーション (性的指向) と歩いているわけではありません。人によっては仕事で見たり、才能で見たり、脳みそで見たり、能力で見たり、精神で見たり、人によって人の判断は様々であるはずです。そう思って周囲へカミングアウトをし始めました。

アデは小学校から中学校 (SMP) 時代に叔父からのレイプを受けていた。アデは、人間は先天的に同性愛的な側面を必ず持つという考えを持って、叔父は自分に対し同性愛的側面を露出させたのだ、と解釈をしている。

叔父 (母の妹の配偶者) は少年愛の傾向を強く持っていたのです。私が小学生から中学生だったころ、彼は私をレイプし続けました。私がいくら嫌がっても、セックスを強要してきました。人が家にいなくなり、私と叔父が二人きりになった時に叔父は狂ったように私を扱いました。これは今でも私のトラウマとなっています。今でも顔を見ると怖くて泣きたくなります。今、私は母、祖母、従

姉妹と住んでいます。その叔父は違う家に住んでいるのでもう会っていません。私は叔父のことをほかの誰にも一切話さないようにしているんです。

私は、人間の 15 パーセント、20 パーセントは先天的に同性愛的な可能性を持って生まれると考えています。それが明らかなものであれ、内に秘められたものであれです。インドネシアで「ホモセクシュアル」といえば、すなわち「ゲイ」だと思われそうですが、もっともっと「ホモセクシュアル」っていうのは広い範囲を指す言葉なのです。ゲイはその範囲の中の一つ。実際私の叔父もそうでした。彼の場合は 80% くらい同性愛的な傾向があったのでしょいうね。

アデが初めて自分が好意を持った男性に受け入れられる経験をしたのは中学 2 年生の時であった。

私は、友人もとてもセレクトティブに選ぶの。友人選びもセレクトティブなら、彼氏ならなおさら。量でなく、質です。かっこ良さはおまけ。(恋人にするなら) 父であり、友人であり、彼氏である、そして賢い人がいいです。私は中学生の時に初めてボーイフレンドとセックスしたの。中学校 2 年生のときかな。私の髪の毛も全然長くない時代<sup>14</sup>。彼はずっと親しい友人で、そのあとも 3 年付き合ったの。これが私のバージン喪失です。彼は普通の男の子だった。彼は私のことを何でも知っていて、友人であり、彼氏であり、父であり、ベッドでは夫だったの。本当に私をよくサポートしてくれる人で。

アデは 1999 年にマカッサルでミスワリアに選ばれ、さらに 2007 年にはインドネシア大会で優勝した。

(高校を卒業して) 1999 年マカッサルに来て、初めて HIV の活動があることを知ったのです。1999 年「エイズ及びドラッグの問題に関心を持つ美しいワリアコンテスト (WCPAN)」で優勝したんです。アメージング! アメージング。全くコネなんて無しに (優勝したの)。友人が私の書類を勝手に出していたの。

---

<sup>14</sup> 服装規定により、男子生徒は短髪でいることが求められる。

写真も勝手に撮って送ってたの。それから私は国際的な会議や委員会に出たり、奨学金ももらって海外へ行ったりね。勝利者はボランティアでエイズやドラッグに関する知識を広めて、対策を打つためのボランティア活動をするのです。この大会の勝利者はコミュニティーの中でも外でも活動する人間になるの。

そして、2001年にYGCは私にアクティヴィストとして働く機会を与えてくれたの。お給料をもらって。私はそのあと2007年にジャカルタのワリアの女王(Ptri waria)を決めるコンテストでも優勝しました。ミスユニバースみたいなものです。

インドネシアのインターネットニュースサイト『Detikhot』には、次のようにアデのインドネシア大会優勝記事が書かれていた。

アデ・リナルダ・カマシ、またはステファン・カマシは「ワリア女王 2007 (Ratu Waria 2007)」に選出された。アデはタイで開催されるワリアコンテストに進出することができる。アデは生殖器を手術することは嫌だという。2007年1月8日のコンテスト終了後、アデは「私は男として生まれ、死ぬときも男として死にたい」と話していた。アデによれば、彼女の性器はただ切除された状態だという。女性としてのあり方で最も大切なのは心と精神であると彼女は言う。(Pebriansyah 2007)。

『Detikhot』はアデは性転換手術を受けていないと書いているが、その後アデは仕事でマレーシアへ行ったついでに、タイで性適合手術を受けたと筆者に語った。

2007年からはジャカルタにオッパ（おばあさんの兄弟）がいたのもあって、そこで仕事をしていたんです。そこでもYGCのようなNGOで働いてましたけど、そんなに真面目にはやっていませんでしたね。セックスワークもしたりとか。

2009年に再びマカッサルに戻ってきました。そのあと現在はYGCのプログラムに参加して、良いキャリアをここで積んでいます。

私は 2001 年に働き始めて。もちろんそこ (YGC) では給料がいいわけではなく、百万長者になれるはずはない。それでも私の責任、(ほかのワリアの) 模範となるのが私の責任だったのよ。

アデ・リナルダは、自分のキャリアに誇りを持ち、ワリアとしてのロールモデルとなって、ワリアの生き方の見本を後輩ワリアたちに示そうと、活動家として働きながら YGC で活動をしている。



写真 1-2 : 2007 年ワリアの女王に選出されたときのアデ

出所 : Pebriansyah Ariefana (2007)

### ③ 「良い」個人であることと、「ワリア」であることの間

アデはコス (kost: 下宿) を借りて、寝泊りをしている。マカッサル市内にある実家は、深夜になると内鍵をかけられるため、深夜に外出するアデには都合が悪いからある。アデの下宿先は平屋の一戸建てで、美容院が併設されている。美容院では、コスに住むワリアやゲイが働いている。このコスは、ワリアが集まって話す (nongklong) 場所にもなっている。筆者が夜コスにいくと、住人ではない人たちも集まってカラオケをしていたり、マンカル (セックスワーク) をするための準備をしたりしていた。アデは「コンドームを持ってきた」と言ってコスの人たちに配っ

ていた。部屋の扇風機の網カバーに KPA から支給されたカバンいっぱいのコンドームを 2、3 掴み程入れ、それをコスワリアがいくつかず取っていった。

アデはコスやホットスポットにコンドームを配って回ると同時に、後輩達を気にかけて、面倒も見ている。例えばセックスワークを最近始めたというワリアには、「お姉さん達みたいにいっぱい稼いでくるのよー」と、小さい声で優しく声をかけたり、他の後輩ワリアにセックスワークの時に着る白いワンピースを貸したりする。ホットスポットを見回りながら、それぞれの場所でワリアに挨拶をしたり、世間話をする。時にはセックスワーク中のワリアの忘れ物を下宿先までとりに行くこともある。アデのコスにいたワリアの友人達は「アデのキャラクターはやさしいよね。頻繁にご飯持ってきてくれるし、コンドームを持ってきてくれるし」と語っていた。

アデ・リナルダは「個人として」周囲に受け入れてもらえるような「良い」人間になり、「他のワリアの模範」になるということにプライドを持っている。しかし、一方で、彼女は他人の意見を気にしやすく、周囲に拒絶されることを極度に怖がるという一面を持っている。

現在アデが YGC のメンバーとして参加しているプログラム GF プログラム<sup>15</sup>というものがある。このプログラムにはワリアやゲイを支援する団体のほか、女性支援団体や男性支援団体などが参加し、頻繁に PKBI<sup>16</sup>マカッサル支部の施設で会議や報告、アンケートの集計が行われる。GF プログラムメンバーはレポート作成作業の他に、定期的にそれぞれの組織が抱える問題などを話し合う会議も行っており、会合は組織同士の交流の場ともなっている。

仕事場の仲間はアデの能力を認め、アデ自身が自分に自信をもって彼女が抱える問題と向き合うことを望んでいた。周囲は仕事をしながらアデをからかったり、時にはアデの体調を心配してアデが薬物を利用することをきつく注意する姿もあった。筆者はある日、アデが「お姉さん」と慕うイメルダが「アデには失望した」と話し

---

<sup>15</sup> インドネシアそれぞれの地区にある HIV と AIDS 関連活動を支援する海外基金が委託した事業であり、マカッサルでは 2003 年に活動を始めた。この事業にはスイスの The Global Funding が資金援助をしている。GF プログラムはマカッサル PKBI に報告書作成を委託し、レポートの結果をもとに必要な箇所に活動支援金を分配する。

<sup>16</sup> インドネシア家族計画協会。性と生殖に関わる問題に取り組む市民活動をサポートする。

ていたのを耳にした。イメルダは、アデがドラッグと同じような作用をもたらす薬物である「ソマッド」<sup>17</sup>を常用するのを止めてもらいたいのだと筆者に話した。

アデはオーバーなのよ。説明しすぎる。昨日会議があったじゃない？ その時やっぱりオーバーだったのよ。質問に対して答えになっていないことをずっと話していて。みんな知っていることをずっとね。アデは確かに頭が良いのだろうけれど、それをひけらかすかのようにずっとしゃべり続けて、みんなうんざりしちゃって。

アデ、(コンテストで)女王になったじゃない。確かに頭もよくてかわいくて。GFに入ってきたときは皆から好かれていた。でも、今は違う。いつもオーバーに話続けるのよ。薬が脳を壊しちゃっているのね。自分で自分を壊しちゃってる。アデはまだ33歳でしょ。そう見えないよね。ワリアはそうなの。自分に自信を持つためにリューマチの薬(ソマッド)を飲む。アデもそう。1錠じゃない。7錠。

アデがいつもよりしゃべってるときはだいたい薬を飲んだ後。人の話を聞かずにしゃべり続けるの。もう私達が当たり前知っていることなのに。アデは十分自信を持っているはずなのにね。

筆者に語った次の日、イメルダはGFの責任者だという人物と共に、アデにソマッドの使用をやめるように説得していた。大机に向かい合う形で仕事をしながらアデは話を聞いていた。アデは、同僚の提案に賛同せず、ソマッドの使用はやめられない、と言った。

アデ:「一粒5000ルピアくらい。高くはない」

イメルダ:「そうじゃなくてね、(振る舞いが)オーバーになるでしょ」

アデ:「でも薬をやめたら、人が何か言うとか泣いちゃうのよ」

イメルダ:「でも健康にはよくないでしょ。昔のあなたと今のあなたは違うよ」

---

<sup>17</sup>ソマッド(Somadril)という名前のリューマチの痛み止めに使う薬で、チャラバイ(ワリア)の中ではドラッグとして頻繁に使用される(Hardon 2013: 219-220)。ソマッドに含まれる成分はアメリカではドラッグ指定されているが(Hardon 2013: 219-220)、インドネシアの薬局では錠剤が個売りされている。

アデ:「昔は(仕事を)楽しんでやっていたから、それは確かに(私の態度は)違うわ。今は真剣にやっているもの(そのためにも薬がないと働けない)」

イメルダ:「まず人から何か言われたら考えなさい。人がどのような想いでそれを言っているのか。それが冗談なのか、あなたの心を傷つけようとしているのか」

アデ:「仕事のためにアクティブにならなきゃいけない。でもセンシティブになる」

イメルダ:「一日何錠くらい飲んでるの?」

アデ:「3錠くらいよ」

イメルダ:「減らせるでしょ」

アデ:「努力はできるけど。でも無理。夜には家族だって、もう鍵かけられちゃうし。だからコスに移動したの」

イメルダ:「普通じゃないよ。覚せい剤(narkoba)と同じ。何のために神様がいるの。私たちはなにか困ったことに会ったら祈ることが出来る。皆欠陥はあるのよ。薬に逃げることは簡単でしょ。元の交際相手と問題があるなんて周りにはわからない。みんな今のあなた(の状態)を評価してしまうのよ。少しずつ量を減らしていきましょうよ」

アデ:「私はまだ混乱してる。ソマッドが覚せい剤かどうか、判断できないの」

イメルダ:「薬に逃げるのは簡単よ。あなたは周りにドラッグについて考えを与えてかなきゃいけないでしょ。あなたが変われば友達だってネガティブな状態から変わることが出来るはず」

アデ:「BBM(携帯電話のメッセージ交換アプリ)でみんな悪口を言ったりするんだもの。薬は感情を強くするし、人の話が耳に入ってこなくなるでしょ」

イメルダ:「自分としっかり向き合わない。出来るわ。出来なくてはならない。(あなたが経るべき)プロセスよ」

アデ:「でも、(私の悪口を言う)男性が...(私は)たばこもやってないのよ」

イメルダ:「おんなじ(ストレスを紛らわすことが出来る)物を求めてはダメ」



イメルダはアデの身体への影響や、実際にアデの振る舞いに変化が見られることなどあげ、量を減らせないのかアデに何度も尋ねていた。彼女は、アデは十分自信を持つことのできる資質があると話し、悪口をいう人に対して、アデはどのように考えるべきかなどを話していた。そして終始「あなたは薬をやめられるはず」とアデを勇気づけていた。アデは時々うつむきながら、イメルダと話をつづけた。

女性の HIV 感染防止活動組織で働くリリーという女性は、筆者に次のようなメッセージを送ってくれた。

私の個人的な意見ね。アデは優しくって教養がある。あとは、他の人とすぐに交流できるよね。最初見たときはね、ちょっと奇妙な感じがした。ふとした瞬間に思っても見ないような偏見が出てきてしまうの、心の中に。だから、最初に会ったときには、男性が女性になりたいということに対して偏見を抱いてしまったの。最初だけ、性別に捉われていたのは。今でもちょっとだけ、どうしてそういう風に生きなきゃいけないのか、っていう気持ちが少しだけ残っている。

でもね、私はアデのような人たちと友人でいられることも誇りに思うの。並々ならぬ学識があるっていうアデの長所をみつけたときに思った。ワリアのコミュニティにそんな人はめったにいないの。時々私は、アデと話していて劣等感を抱くこともあるの。アデが本当に知識を持っているから。私が知る限りにアデくらい教養があるワリアはいない。まずは、HIV やエイズについての知識が豊富。そして、周りに対する洞察力も優れている。色々なコミュニティーを見てきて、最も洞察力に優れている人だった。私が知っている限り、ワリアって大体化粧がうまいとか、髪の毛を切るのがうまいとか、夜にぶらついてセックスワークするとか・・・。

筆者は、「なんでアデは薬に頼るくらいひどくセンシティブなんでしょう。十分尊敬を集めているのに・・・」とリリーに意見を求めた。しばらく経って、彼女は次のように返してくれた。

私思うに、彼女の魂は 100 パーセント女性なんでしょうね。思うに、女性ってみんなセンシティブな一面を持っている。でも、センシティブな部分ってある時、時々出てくるものなの。私もそう。昔アデは自分に自信を持ってたよ。私から見ると、彼女は今でも自信を持っている。(でも、アデがいつもセンシティブなのは) ソマッドを飲んでいる影響(副作用)みたいなものかな。彼女はソマッドを使う前はもっとも頭が良いと感じさせる人だったの。今、彼女はソマッドによって自信を得られる幻覚を見ているだけだと思うの。

安心して。アデは大丈夫。私達もアデの友達だから。アデをここでコントロールしているよ。(アデを何とかしてソマッド依存から解放しようとするアデの)モチベーションは、彼女がソマッドを使う前にどういう人だったかを思い出させ続けることと、アデにソマッド無しの生活をイメージさせること。今、アデの友人達はみんな(筆者がいた時と)変わらずアデをコントロールしようとしているし、注意もしてる。(彼女が注意を聞かないのは)もう薬に慣れてしまっているから。どうかうまくいくように祈っていて。

あきらめてはだめ。私達は人間として何か望むことがあるのなら、それを終わらせられるように努力しないとダメ。努力を続けていれば必ず解決方法が見つかるはず。挑戦してあきらめてしまっはダメ。

アデは職場の仲間を「お兄ちゃん (brother)」「お姉ちゃん (sister)」と表現していた。周囲はアデの能力を認め、アデ自身が自分に自信を持つことや、問題と向き合うことを望んでいた。しかし、アデ自身はありのままの自分にどこか自信が持てず、少しのことに敏感に反応してしまう傾向がある。

アデは、筆者とカフェなどで会話するときにも周囲を気にすることがあった。カフェで話をしているときには、アデは他の客が笑い声や、やや大きな声を出すたびに一瞬身を震わせて反応し、振り返った。筆者が大丈夫か、と尋ねると、アデは「大丈夫。彼らはすごく差別的なの」と答えた。しかし何度も振り返るので、筆者が場所を変えることを提案したが、「大丈夫。慣れてるわ」と答えた。

大丈夫。ただ、ここは都会で、とてもお金持ちのすんでいるところで、間違っ  
たものをそのまま信じている人が多いの。スティグマがすごく強いよね。ビス

の歴史があるところはもっとワリアを歓迎してくれる。でもここはハラーム(宗教上の禁止事項)、ハラール(宗教上の許容事項)ってことばかりにしている人が多いから。私たちのことを嫌いな人も多いの。

また、アデは筆者の知り合いの女性と、その周囲を警備する男性について次のように述べたことがあった。

私は...えっと、だれ? あのおばさんが怖い。あとあの警備員もね。おばさんはトイレを借りたときに私に水を使わないように言っていたし。どうしてだろう? 普通、用をたしたら水を使うものでしょ。だから私は持っていた飲料水を使ったの。トイレが壊れていたからそう言ったんだって思いたいけど。でも(違う)。もうやめよう、この話。

アデは、堂々と自分のあり方に自信を持って生きているようとしている。しかしアデは周囲からの嫌悪を気にしている。アデのこのような言動は、家族に対しても見られる。アデの実家は教会近くの住宅街にある。バイクで15分圏内の実家の近所には、親戚達も住んでいる。アデの実家は2階建ての一戸建てで、庭も家の中も美しく保たれている。筆者がアデの祖母の誕生日パーティーに招待されて、アデのバイクに乗って家に向かっていた途中で、アデは家の500mほど手前でバイクを路肩に止めた。「着替える」と筆者に言い、着ていた薄手の女性服の上にデニムのシャツを羽織って、それから長い髪の毛をバンスクリップで上に挙げて留めた。「セクシーに見えてはダメ、嫌がられる」とアデは言った。

これから私の家に行くけど、(母や祖母以外の親戚には)ワリアの研究だってことは伏せて。マージナルマンとかマイノリティの研究だって言って。もちろん私がこういう風なのを知っているんだけど。ワリアって言ったら周りが嫌がるから。私は他のワリアとは違う。考えなしにしゃべったり、セクシーな服を着たりはしない。

あなたはただのお客さん。友達。いいわね。私の仕事は(色々な人と)つながっているから不思議ではないはず。

周囲はアデの状態を知っていても、アデがワリアであると言われるのは嫌がるのだ、とのことだった。彼女の母親は、アデについて次のように筆者に語った。

おおおー。彼（アデ）はちょっと前は普通だったのよ。ただのいたずら息子だった。（でもアデが）中学生のときに、彼の友達に（アデが“ワリア”だということを）聞いてさ。死ぬほどびっくりした。いつも家ではただの男の子だったからさ。もう、どうしてそんなんになったんだかさっぱりわからなかったよ。

彼は唯一の息子だから、家族全員がそれ（アデが“男”に戻ってくれることを）を望んでいる。ああいう（“男”が“女”になる）のは良いことではない。男に戻ってほしい。でももう、あんなんになって。（もとは）戻れないよ。タイに行って手術してきちゃうし。本当に（もとに）戻ってほしいよ。無理だろうけどね。諦めてるよ。もう感情的になるのは疲れた。

外を歩き回られるといや。恥ずかしい。周りから笑われて。笑われなくても彼女がそういうことするのはいや。たった一人の息子が。

捨て去ることはしない。子どもだからね。どういう子であっても愛さなくてはならない。あの子は私の服や鞆を借りて身に着けることもある。私はもう二度とその服や鞆を身につけることはありません。そういうの（ワリア）嫌いだから。もう着ない

筆者は、「アデは成功しているワリアではないのですか」と尋ねた。アデの母親は、アデの生き方に賛同できず、不満があるとのことだった。

まだね。あの子はいつもお金を借りに来るし。給料は全然足りないし。私のお金を恥ずかしげもなく持って行って。私が妹の家で家政婦をして稼いだお金の。に。（アデには）もっと給料が高いところで働いてほしい。でもあの子は（今の給料で）十分だって（言う）。でも、（実家に帰って）来たと思ったら必ず金をせびる。

（コンテスト優勝の話も）テレビで見たから知ってるよ。でも私はそもそもあの子がああいう風にしているのが嫌いだから、別に何とも思わなかったけど

ね。いつも（アデに振る舞いや格好を男に）戻せ戻せって言ってるのに聞かない。

彼女は「私はヤデ・リナルダ・カマシ (Yade Rinalda Kamasi)。昼も夜も、自分の生きたいように生きているから名前は一つしかない。人に愛されたかったら、まず自分のありのままを受け入れて生きなさい。これが私のモットーなんです」と筆者に話したことがある。

私は誰かに与えられたいと思ったら、まず自分が自分に与える事を原則として生きています。そしてバランスですね。私が良い人間で、良い心を持って、人を助けていればいいと思います。たとえ、私がこうであっても、しっかり家族を養えば、家族は愛してくれると思います。

アデは周囲の感情に振り回されない自分をアピールしているが、実際には他人の顔色を伺い見て、慎重に行動しようとする。さらにアデは、周囲の悪意を感じ取るだけでなく、自分が他のワリアと違うことを周囲に強調することもある。

アデは家の近くにある、マカッサルで最も大きいという教会に通っている。協会では日曜日のミサを一日に 5 回行う。5 回目のミサにアデが筆者を連れて行ってくれた。協会は、ビルのような外見で、中にはガラスの壁があり水が流れている。その壁の先にホールがあり、入口より 50 メートル先位にステージがあって、ステージの大画面の前で牧師がしゃべっていた。会場には 10 以上もの液晶テレビが備え付けられていて、集まった 1000 人以上の人はパイプいすに座って話を聞いていた。アデは水を飲んでから、パウダーファンデーションをつけた。牧師の話が終わると、歌が始まる。バックバンド、ピアノの生演奏、赤いズボンをはいたコーラス隊を牧師がリードし、それに合わせてミサの参加者が立ち上がって歌った。アデも体を揺らしながら、右手を挙げて抑揚を付けながら歌っていた。彼女はミサが終わりかけの頃に教会内の写真を撮り、筆者に次のように言った。

週に 1 回しかないのに、クリスチャンの友達に挨拶に来ないの。私が来ていることも信じられないみたい。だから後で BBM（ソーシャルネットワークサービス）のアカウント画像を今のミサの画像にするの。

アデは、自分の信仰心が厚いという姿を周囲に知ってもらうことで他のワリアとは違うという評価を得ようとしている。実際にアデは、「私は他のワリアとは違う。考えなしにしゃべったり、セクシーな服を着たりはしない」と言ったり、「私の友達みんな家族にお金を渡さずに自分の彼氏を養う事に集中しています。あとは楽しむために使ったり。私は家族に渡すものだと思っている」と言うのがあった。たしかに、アデは自分が「ソマッド」の使用を正当化する理由として「たばこもやってないのよ」と自分の正しさをアピールしようとした。だが、アデは喫煙はモラルに反することとして捉えているにもかかわらず、アデは筆者を他のワリアに会わせるときにはタバコを購入するように言い、他のワリアがタバコを吸うのを止めはしない。ワリアである自分を否定しながら、ワリアの仲間たちの支援をしているようにも思える。自分がワリアであるということと、それに由来する偏見から逃れようとしているが、成功していない。職場の仲間の 1 人の男性は筆者に次のように語っていた。

アデはトランスジェンダー（ワリアやベンチョン）のカテゴリーに入る。ほとんどのワリアはプライドが高くて、不愉快な気分になりやすいし、歩き回ったり、裁縫してて、あとほうるさい。ワリアをすぐ信用してはならない。彼らのキャラクターや個性は予測不可能だから。個人のワリアを捉えるときに、文化とキャラクターは重要な要素だよ。

インドネシアのスラウェシの「ワリア」の性別は個人の違いに優越して、画一的な生き方の例や型（パターン）と考えられる傾向にある。よく耳にするワリアに対する評価は、偏見や差別に満ちたものである。すなわち、過度に女性らしい、うるさい、HIV、職業を持っていないというものである。彼女がいくら「良い」ワリアになろうとしても、「ワリア」であることのためにネガティブな評価や嘲笑を受けづける。家族という身近な存在も、アデのワリアとしての活躍を榮譽であると考え

ておらず、跡取りのあり方に不満を持ち続けている。自分がより「良い」人間になれば家族に受け入れてもらえると語っていたアデ・リナルダは、周囲に自分を受け入れてもらうために「良い」ワリアになろうとする態度をとっている。しかし、それと同時に自分が他のワリアと違うことを強調し、偏見の対象となるよう「ワリア」という肩書から自分が抜けようともしていた。彼女の「良い」人間になろうという意思は、他の「悪い」ワリアと一括りに見なされたくないという思いと表裏一体となっている。

現在のワリアの型には、ネガティブな評価がまわりついている。ネガティブなパターンに当てはめられたところから逃れ、居場所を得ようとするために、アデは「良い」ワリアを強調しているのである。アデ・リナルダの居場所に対する態度には、「良い」ワリアだと周囲に理解してもらう努力し、自己役割感を高めることで、差別対象たりえる自分を顕在化させないようにする方針があるのだ。

#### 4. 結論・考察

ニューハーフもワリアも、同じセクシュアリティの者同士の繋がりだけで生きているわけではない。ニューハーフやワリアが生きる場所では、セクシュアリティを共有していない者同士の連帯が作られ、また現在それを作ろうとこころみられている。そのとき、セクシュアリティの揺らぎを経験した人が持つ特徴は、それ以外の人たちとの間でどのように扱われているのだろうか。

国分町のニューハーフの事例では、『『人間として』付き合ってるから、ニューハーフとして見る人とは友達になれない』、や、「ニューハーフだって一人ひとり違うの」という語りが聞かれた。客相手の商売の際にもスタッフのパーソナリティは重視されていた。佐佐木ジャッキーは、ニューハーフではなく、一人ひとりの違う人間として見てほしいと語り、客側にその思いや自分がどのような人間なのかを説明することもあった。

ニューハーフバー「SBJ」で働くスタッフは男性もしくは女性の異性愛者である。セクシュアリティを共有していない者同士の親密なつながりの中で、ジャッキーはニューハーフであることより、人間として尊敬できるから応援をするという語りが

多く聞かれた。ジャッキー自身も、自分の友人達はジャッキーをジャッキーとして好きでいてくれると述べている。

国分町ニューハーフの事例に見られる、人々の居場所に対する態度には、当事者および周囲共にセクシュアリティを人間の評価尺度から後退させ、「その人らしさ」を重視する傾向がある。そのため、「性別」に拘泥することはナンセンスだと考えられている。

一方で、南スラウェシのアデ・リナルダは、自分がより「良い」人間になれば家族に受け入れてもらえると言っており、そのために「良い」ワリアになろうとすることを選んだ。しかし、それと同時に自分が他のワリアと違うことを強調し、偏見の対象となるような「ワリア」という肩書から自分だけが抜けだそうともしていた。アデは、ワリアであることを含めてありのままを肯定され、そして自分の存在に自信を持つことのできる関係性を持っていない。周囲に押し付けられてしまうネガティブな「ワリア」の枠組みから逃れ、居場所を得ようとするために、アデは自分が「良い」人間であることを強調しているのである。アデ・リナルダは彼女の居場所において、「良い」ワリアだと周囲に理解してもらう努力し、自己の役割を高めることで、差別対象たりえる自分を顕在化させないようにしているのだ。

セクシュアリティを共有していない者同士の連帯が作られようとしているとき、セクシュアリティ以外の部分を重要視するという態度がそれぞれに見られるが、それがどのように評価されるかは異なっている。

そもそも「ニューハーフ」とは、周囲に望まれたキャラクターであり、ビジネスとして重要な価値を持つキャラクターである。さらに、その人個人の「人間として」のパーソナリティは店ごとの特色にもなり集客にも繋がる。さらには、マイノリティに対する政治的関心や近年の教育や法整備などによって、徐々に生きやすい環境の整備が進められている。ニューハーフとして働く、国分町の MtF の揺らぎを経験した／している人々は「ニューハーフ」として特別視される。国分町のニューハーフは、「ニューハーフ性」をビジネスとして必要なこととして考え、本来の自分とは異なる可能性も残しつつ「ニューハーフ性」を拒絶したり、否定することはない。周囲も、「揺らぎ」を経験した人々を「揺らぎ」を含めて一人の「人間として」見ようとする。そのような環境の中で佐佐木ジャッキーは、揺らぎを経験していない人々との相違点を長所として生かし、さらに個人の魅力を発揮することができた。



一方、現代スラウェシのワリアは、かつて固有の役割と権威をもっていた「チャラバイ」や「ビス」とは違い、差別や偏見の対象となっている。そのような中でネガティブなイメージを想起させる「ワリア」の特徴は、個人のネガティブな評価を覆すことを阻む桎梏として見なされる。マカッサルの「揺らぎを経験した人」は、社会に与えられた規律を守り、目立たないようにしながら、害がないことを周囲に理解してもらうことで親密な関係を築かねばならない。そのために、時には自分自身の「ワリア」を否定して、「人間として良く」あらうとするのである。しかし、完全無欠な「良さ」に適合できないワリアは、どこか自分に対する劣等感を持ち続けることになる。そして周囲から認められない状況が続くことで、さらに自分に対する劣等感を強めていくことにもなる。スラウェシのワリアは他の地域と同様に「ワリア」として最低限の権利を要求していこうとしているが、当時者以外の人たちとの違いは開き直って受け止めるにははるかに大きい。

スラウェシ南部の MtF の揺らぎを経験した「ワリア」は周囲からの差別を受け続けることで、ワリア自身がワリアの「ワリア性」を嫌悪することになっているのだ。そして、その結果として逃げるのが難しい「ワリア性」から逃れることで、「個人としての」居場所を求めようとする事にもなるのである。周囲から「揺らぎ」そのものや、「揺らぎ」に見られる要素を排除、あるいは抑圧することが求められる。そのために自分の「揺らぎ」を不意に見せてしまって、居場所がなくなってしまう恐怖と常に戦わなくてはならないのである。

## 引用文献

張帥

- 2013 『日本のセクシュアルマイノリティに関する文化人類学的研究—仙台市におけるフィールドワークを中心として』 東北大学文学研究科修士論文。

Darmapoetra, Juma

- 2014 *BISSU; Perantara Dewa: 2014*, Makassar Indonesia: AEUS TIMUR.

Echols, Jhon M. and Shadily Hassan

1989 *Kamus Indonesia Inggris: An Indonesian-English Dictionary* 3rd. eds.,  
Jakarta Indonesia: PT Gramedia.

Hardon, Anita. Idrus, Nurul Ilmi. Hymans, and Takeo David  
2013 “Chemical sexualities: the use of pharmaceutical and cosmetic  
products by youth in South Sulawesi, Indonesia”, *REPRODUCTIVE  
HEALTH MATTERS*, pp.214-224, Nederland: Elsevier Science.

石井達郎

2003 『異装のセクシュアリティ』東京: 新宿書房。

伊藤眞

2003 「女の心を持つくかれら> インドネシアのチャラバイ」松園万亀雄  
(編)『性の文脈』pp.226-248、東京: 雄山閣。

Lathief, Halilintar

2004 *Bissu : Pergulatan dan Peranannya di Masyarakat Bugis*, Depok  
Indonesia: DESANTARA.

2009 *Orang Makassar*, Yogyakarta Indonesia: PADATDAYA.

Nanda, Serena

2014 *Gender Diversity: Crosscultural Variations*, 2nd edition, Long Grove  
United States: Waveland Press.

大塚隆史

1995 『二丁目からウロコ』東京: 翔泳社。

Pebriansyah Ariefana

2007 “Putri Waria 2007 Ogah Operasi Kelamin” Detikhot, 2 August  
2007. Retrieved January 4, 2016, from  
〈[http://hot.detik.com/read/2007/08/02/104811/812351/230/putri-  
waria-2007-ogah-operasi-kelamin](http://hot.detik.com/read/2007/08/02/104811/812351/230/putri-waria-2007-ogah-operasi-kelamin)〉 .

砂川秀樹

- 2001 『パレード 東京レズビアン&ゲイパレード 2000 の記録』 東京: ポット出版。
- 2003 「新宿二丁目が照射する異性愛社会」 松園万亀雄 (編) 『くらしの文化人類学 4 性の文脈』 pp.196-225、東京: 雄山閣。
- 2007 「14 章 セクシュアリティの多様性とその変容 - 人類学のホモセクシュアリティ研究から」 宇田川妙子・中谷文美 (編) 『ジェンダー人類学を読む』 pp.331-345、京都: 世界思想社。
- 2015 『新宿二丁目の文化人類学 ゲイ・コミュニティから都市をまなざす』 東京: 太郎次郎社エディタス。

山内俊雄

- 1999 『性転換手術はゆるされるのかー性同一性障がいと性のあり方』 東京: 明石書店。